



陳言コラム-34

中国雑談

過剰生産体制と魏橋アルミ

10月連休の前に、山東省北海市を取材に出かけました。北京から車で3時間半、市内を出ると、割合と道路が空いていました。

北海は、塩の名産地ですが、それ以外には有名なものはあまり多くはありません。海水を小高いところへ汲み上げ、濃度が高くなるとさらに高いところへ汲み上げていき、一番高いところでは塩の結晶が少し出ています。浜辺では小高いと言っても普通の人から見れば、どこも平野であり、建物がほとんどありません。

突然、大きな煙突が出て、その近辺にアルミ精錬の工場、アルミ型材を加工する工場が集積しています。著名なアルミ企業である魏橋が目の前に現れました。

数カ月前に、『フォーチュン』誌が発表した「2016年中国で最も影響力のある50人のビジネス界のリーダー」のうち、トップ4は、馬化騰（騰訊・テンセント）、任正平（華為・ファーウェイ）、張士平（魏橋・ウェイチャオ）、馬雲（阿里巴巴・アリババ）の4氏でした。張士平は別として、中国にしばらく駐在している方なら他の三方の名前、少なくとも企業名は知っているでしょう。魏橋の張士平はそこに並ぶリーダーなのです。

中国の過剰生産体制の中では、鉄鋼、アルミ、セメント、板ガラスなどすぐ頭に浮かんでいましたが、魏橋はそうではないようです。「最新の設備投資をした工場です」と白い煙を噴き出す巨大な煙突の前で地元の役人は語りました。外から電解工場の建屋なども見て、建設して一、二年も経っていないと感じました。

アップルのスマホボディの90%のアルミ板素材が魏橋から供給されており、世界市場にはアルミ製品などを輸出していると聞きます。過去3年あまりの間に、アルミ業界内の版



図は全業界が大不況という情勢のもとで、魏橋は、逆に二倍以上に規模を拡大させていると言われます。

実は、2001 年から、魏橋のアルミ産業の全産業チェーン上の配置を完成させ、チェーンの「上流」の原材料であるボーキサイトからアルミナ、アルミニウムの電気分解まで、さらには「下流」のアルミ材加工業まですべてを一貫して、産業配置を密集させることで内部物流や加工のための貯蔵・運輸コストを下げるなどにより、可能な限り上流から下流までの間の各種コストを抑えました。

アルミの生産加工のなかで、エネルギー消費はコスト全体においてかなりの部分を占めています。1990 年代中・後期には、電力の欠乏が工業生産のボトルネックとなっており、魏橋はこの問題を解決するチャンスを探っていました。魏橋は自社の発電所を建設しましたが、その発電所のコストは国営発電所のものより 3 割も低かったそうです。

この重要な一歩のおかげで、魏橋はアルミ産業の激しい競争のなかで、「アルミ製造と発電の一体化」というアドバンテージを利用し、常にライバルに圧勝してきました。魏橋では電解アルミニウムの生産コストが競争相手よりはるかに低いといわれます。

過剰生産は中国のいたるところで出ていますが、その削減に中央と地方は力を合わせて努力しています。しかし、これは同時に魏橋の発展にとって千載一遇の機会となっています。